

法を定め二九日まで毎日一〇〇名ずつの救援隊のほか、郡各種団隊の任意活動、三〇日以後は毎日五〇名ずつの出動とした。（「北但震災誌」）

つぎに当時の資母村消防組頭佐古弥之助氏の救援手記をかげ、現場の実況を想像しよう。

1、北但大震災救援活動

大正一四年五月二三日午前一一時半、農作業中突然、強烈なる地鳴りにつぐ震動を感じ、事態重大を直感して帰宅し松本幾造君から「西方に大煙の立のぼるのをみた」ときき、豊岡方面と判断した。果然、在村医師全員と救援隊の発動を要請してきた。よつて第一陣として在郷軍人会員を非常召集し約一〇〇名及び藤井猪三郎医師を加え、橋本吉之亮・在郷軍人会長指揮の下に直ちに出発終夜救援に活動。次に第二陣として同夜各部落に通達し消防団員の出動を求め、翌二四日早朝を期し太田小学校庭に集合一五〇名即時発進するよう今井甚兵衛村長よりこれが指揮を命ぜられた。

当時は電話の便なく実況把握不能、しかもデマが乱れとび動乱に赴く異常感に身ぶるいしたが、とりあえず左の措置を採った。

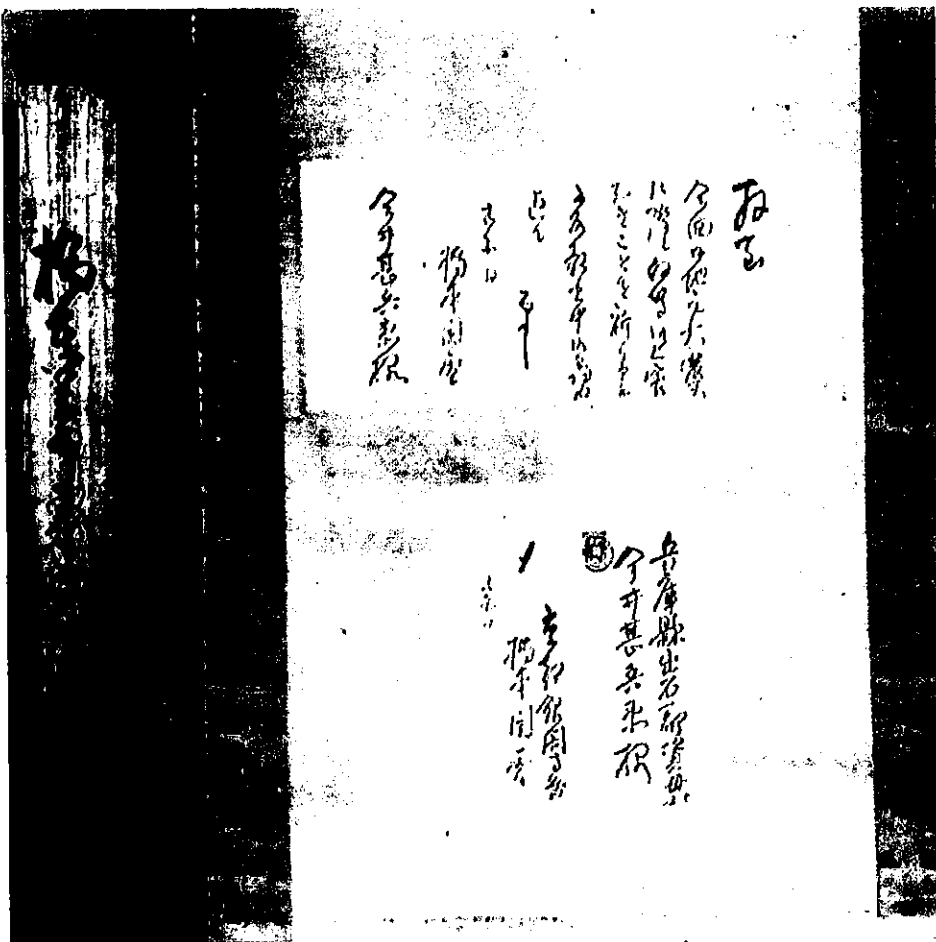
一、一同は自転車利用のこと。

二、如布組小頭宮垣重太郎は組員一〇名を率い先隊となり弘道校庭に到着し本隊に状況報告のため数名を残す。引続き現地に向い豊岡小学校庭に待機して本隊の到着を待つ。

幸い途中支障なく午前八時半現地到着、追従の隊員を加え二〇〇名となる。直ちに中学校の救援本部に赴き指揮を受く。任務は負傷者の収容と食糧の救援にあつたが米の未着が原因し、いたずらに焦

写真 北但地震に対する資母村長への見舞状

橋本閑雪（明治一六年～昭和二〇年）
大正・昭和前期の日本画家、兵庫県生れ、竹内栖鳳の門に入り「寒山拾得」「倪雲林」は文展特選に入った。大正二年以来、中国旅行二〇回に及び、中国の風物地誌にくわしく文章、詩にも独自の風格があった。帝国美術院会員、帝室技芸員。代表作「長恨歌」「進馬乃図」など。



鳥取 今井敏郎氏提供

図表 76 大正14年 5 月23日11時 9 分57秒（北但地震—火災を伴う）被害

被害別	死者	負傷	住 宅					そ の 他 の 建 物					被 害 金 額	
			焼失	全壊	半壊	破損	小計	焼失	全壊	半壊	破損	小計	家 屋	その他財産
城崎郡 出石郡	425	806	1,696	942	1,263	4,151	8,070	2,203	526	843	1,508	5,059	26,496	63,033 千円
内 合橋村	—	—	—	—	—	12	12	—	—	—	—	—	—	—

（注）震央 円山川河口 昭和29年「兵庫県災害誌」による

燥狂奔であつた。よつて全員を三班に別ち、

第一班 死体の収容、運搬。救援米到着につき駅より運搬。

第二班 中学校炊事室（今井宇太郎担当）中学校当局の理解により炊事室及び設備一切を開放。

第三班 女学校炊事室（安達嘉藏担当）。

右二炊事場は米の到着を待つて炊飯に従事し、順次町内へ配給した。止むを得ず女学校庭を掘つて応急の釜を構築したが、もとより熱の回り悪く飯のでき悪く苦心した一面もあつた。（中略）その夜に至り神戸周辺より派遣の警察、消防、県庁職員、報導員到着したため極度に飯米不足となり炊事係は殆んど一睡もせず終夜活躍し、夜明けとともに列をなして飯米を待ち、煙に巻かれ焦げたる握り飯に何ら不満もなく立食の被災者には衷心同情に堪えなかつた。また阪神方面よりの多数応援隊員も哀願的に配給を乞ひ氣の毒に耐えない思ひであつた。

救援も一応、緒（いとぐち）についたので早朝市内の視察を乞うた。最も激甚を極めた駅通りの新築家屋は殆んど全壊、新家屋材に鮮血の染つたのをみて肌を粟を覚えた。（中略）

今朝来全但地区を始め遠近の救援隊続々と到着し、本部の挨拶により一応引揚ることとなり、出発に当り避難の老人達が路傍に跪座して合掌するのを後に、同日午後太田校庭と資母校庭において今井村長初め、多数村民諸氏より感謝の出迎えを受け一同解散した。

2、北丹後大地震救援活動

昭和二年三月七日午後六時二〇分、夕食にかかろうとする時、北丹後を中心とする大地震が発生し、村民